51 社内座談会のテーマ・参加者はどう決めたらよいですか？

●テーマと参加者をリンクさせて考えてください。

座談会を催す狙いはいくつかありますが、その一つはOB、先輩、同僚社員を制作に参加させることによって、社員の関心を社史にひきつけるということです。せっかく社史をつくっても誰も読んでくれないようでは、寂しいものです。そういう事態を避けるために、「仲間」を誌面に登場させるわけです。また、堅くなりがちな本文に比べ、読みやすいということも読まれる要因となります。

もう一つの狙いは、本文では書けないこと、書きにくいことを記録するということです。たとえばある画期的なプロジェクトについて記述するとして、本文ではあくまで事実関係を中心に書いていくしかありません。しかし座談会ならば、そのプロジェクトの関係者の口を借りて「開発の裏話」「苦労話」「精神的なプレッシャー」なども書くことができ、歴史像に奥行きをもたせることができます。

座談会に参加するメンバーですが、一般的には、歴史を振り返る内容のときには旧経営陣・

●創業の頃を回顧する／古参社員５名

●戦後復興期の会社像／創業者と同郷のOB5名

●ABCプロジェクトの展開（製造業）／関係者６名

●まちと共生する港　センターと横浜の10年（財団法人）
／市長・大学教授・タウン誌編集長・理事長

●お客様と共に（サービス業）／社長・若手社員６名

●働く喜び　明日の○○への夢（労働組合）／組合員９名

●○○会社の2050年を視る（製造業）／若手社員５名・作家（司会）

●未来創世　○○の今とこれから／中堅・若手社員６名

▲ 対談・座談会のタイトルとメンバー例

OBらが中心になります。将来を展望する内容のときには若手～中堅にかけての方と、取りまとめ役（聞き役）として社長や上司が参加したりします。人数は最大で七～八人くらいまででしょう。あまり多いと一人あたりの発言が少なくなったり、極端な場合には一言も言えずに終わる人が出て、まとめに難渋するといったトラブルの要因になります。

メンバーとテーマとは密接に関連します。取り上げられるテーマは①創業期を振り返る、②歴史上の画期となった出来事を振り返る、③これからの会社のあり方を考える、などが大勢をしめています。